

県 外 派 遣 報 告 書

(一社)栃木県バスケットボール協会 審判委員会

大会名	令和6年度第54回関東中学校バスケットボール大会	開催地	千葉県 船橋市
報告者名	岡 龍哉 ・ 平山智章 ・ 倉持雄一	派遣期間	8月7日(水)～8月9日(金)

8月5日(月)審判研修会

講師	渡邊諭 氏 ・ 岸由貴 氏 ・ 六角亜沙美 氏
会場	zoomミーティングルーム
<p>審判会議式次第</p> <p>(1)挨拶 一般社団法人千葉県バスケットボール協会 専務理事 大野 健男 氏 一般社団法人千葉県バスケットボール協会 審判委員長 中嶽 希美子 氏 関東バスケットボール協会 審判委員長 平原 勇次 氏</p> <p>(2)指名審判員レクチャー 一般社団法人栃木県バスケットボール協会 S級審判員 渡邊諭 氏 一般社団法人群馬県バスケットボール協会 S級審判員 岸由貴 氏 一般社団法人東京都バスケットボール協会 S級審判員 六角 亜沙美 氏</p> <p>(3)審判割当確認</p> <p>(4)代表者会議伝達事項 TO・MCについて</p> <p>(5)連絡事項</p>	
<p>【指名審判員・レクチャー】</p> <p>渡邊諭 氏</p> <p>〇メンタルの保ち方、信頼されるレフリーとは 「正しい判定」を続ける「姿勢」が大切 正しい判定をするにはルール・技術の理解が大切である。 足を運んで自分の目でプレーを確かめること→判定の根拠と裏付けとなる。 これを40分間続ける→ブレない判定→メンタルが保たれる。</p> <p>〇自分のプライマリーでのプレー ポジションアジャストをし続けることでグレーな部分を解消する。</p> <p>〇ヘルプディフェンダーについて 今見るべきは何なのか優先順位を把握する。 広がってヘルプディフェンダーだけを探してはいけない。どのポジションでも、ボールとその周辺のプレーヤーがどう動くのかコート上で把握することが大切。</p> <p>感想:判定力の大切さを再認識しました。40分間、自分の目でプレーを確認することをどのゲームでも続けていけるようにしたいです。判定の根拠と裏付けができるものを増やすことで、自信を持って試合を進めていけるようにすることが大切だと感じました。</p> <p>岸由貴 氏</p> <p>〇選手とのコミュニケーションについて 「何が」「どうだった」「どうなら良いか」をルール、ガイドラインに則した言葉を用いて「短く」「丁寧に」伝える。 無視しない。フラストレーションをためている選手ではなく、冷静な他の選手に伝えることもある。選手の表情をよく見る。スローインや流れの変化を感じた時に声をかけることを意識している。</p> <p>〇POCを正しく判定するために ・誰のプライマリーか ・ポジションアジャスト ・レフリーディフェンスを大切に。※自分の無意識や癖を振り返ることも大切。</p> <p>〇自分自身の強みや課題を明確にするために 客観的な視点からのアドバイスを大切に。 ①現状把握②正しいメカニクス・自身の目標やイメージとのギャップ(課題)③要因・解決策④修正実践⑤確認 自分のこだわりも大切に、でも周りの言葉をもっと大切にしないといけない。</p> <p>感想:コミュニケーションはもっとチャレンジしなくてはいけない要素なので、タイミングや方法など勉強になりました。また、ゲームの振り返りは自身のレベルアップのために特に必要だと感じているので、多くの方々のアドバイスを大切に振り返り、改善していきたいです。</p> <p>六角亜沙美 氏</p> <p>〇審判のレベルアップに向けて ①リードの時の視野の取り方、ローテーションのタイミングについて</p> <p>「何をしたいのか」体と顔の向きで示す。→他のクルーが見るところを明確にする。</p> <p>〇タイムマネジメントについて 動いたこと・止まったことを声に出して確認。 フリースローバイオレーション時はクロックが動きやすいので注意。</p> <p>感想:バスケットボールのゲームにおいて正しく時間が進むことに関して、審判がOCメンタリティを発揮してタイムマネジメントすることの難しさを最近実感しています。常にクロック類を把握することをチャレンジしていきたいです。</p> <p>3名の指名審判員の皆さんの実践していること、試合を進める上で大切なことを学ぶことができ、大変充実した研修となりました。</p>	

審判員	岡龍哉(栃木)・小原宏太(埼玉)・清水倫人(山梨)		報告者	岡龍哉
カード	銚子一(千葉) vs 大森第三(東京)			
コート	Bコート	主任	阿久沢尚夫 氏 (群馬)	
<p>積極的にドライブからのアタックをしてくる両チームの戦いで、リーガルなプレーなのか、イリーガルな動きをしたのかクローで協力しながら判定をしていきました。その中でもクローで誰にファウルをつけたかを互いに把握しておくことが必要でした。互いにイリーガルなものを一つ一つ判定していったが、3クォーターで青に対する白のファウルを逃さずつけていくことで、点差が開いてしまっても青が頑張っていけるのではないかと、担当IRから試合後のミーティングで話がありました。また、マジックタイムに気づいていながら、時間が頭の中から抜けてしまい修正できなかったことで、時間の把握がまだまだ課題だと感じました。ゲームフローを感じながらファウルバランスを把握し、必要な笛を入れていくなど、ゲームを通して様々な所に気を遣いながら進めていくことができるようをつけていきたいです。</p>				

審判員	山岸大輔(埼玉)・岡龍哉(栃木)・星河聖(群馬)		報告者	岡龍哉
カード	由井(東京) vs ちはら台南(千葉)			
コート	Dコート	主任	加藤暁生 氏 (東京)	
<p>PGCでは、シンプルに目の前で起きた、明らかなバイオレーションやファウルを一つ一つ積み重ねることを1試合続けようと言いました。その約束通り、それぞれのレフリーが自分のプライマリーでの現象を判定していくようにしました。担当IRからはその中でも、ゲームの流れが変わった時間帯での判定について、どのように準備し、プレーを確認するべきか話がありました。また、時間を修正する際のクローワーク、見せ方のアドバイスがありました。また、映像で試合を振り返ると、プレーを長く見るため、もっと早くポジションに入る必要があり、その後のポジションアジャストするための細かな動きも足りないと感じました。ゲームは、両チームともオフェンスであり、ディフェンスもタイトに守るチーム同士の戦いになりました。選手が思いきったプレーをできるよう一つ一つ丁寧に取り組みました。今回の関東大会では、現時点の自分のできることで、修正して今後に生かしていきたい部分が再確認できる大会となりました。また、プレーに足を運び、自分の目で確認し、根拠のある判定を続けていくことが自信や、チームからの信頼を得ることができるということを感じることができました。また、様々なレフリー仲間と切磋琢磨しながらも、割当を勝ち取れるように頑張りたいと強く思いました。最後に、今回の派遣にあたり、準備よりご尽力いただきました。地元千葉県の皆様、派遣に際しご配慮いただきました梶審判長はじめ栃木県の皆様に心から感謝申し上げます。報告といたします。</p>				

審判員	平山智章(栃木)・原弘高(東京)・田中優佑(茨城)		報告者	平山智章
カード	小手指(埼玉) vs 八街(千葉)			
コート	Aコート	主任	若林謙作 氏 (栃木)	
<p>1Qからチームファウルのバランスが傾いてしまい、ファウルとして取り上げたものの中で、マージナルとして見れるものもや、声かけをして止めさせられるものがあつたのではないかと反省をいただきました。笛を吹くことだけではなく、プレーヤーとのコミュニケーションの取り方も審判員としての大切なスキルであると改めて感じ、今後磨いていきたいと思いました。COとしては、もっとクローとしての判定基準を3人で擦り合わせられたらよかったと感じました。今後はゲームの中でそういったコミュニケーションを取れるようになっていきたいと思いました。EQOのところで、クォーターの終了間際にバイオレーションやファウルが起こった際に、それらをしっかりと取り上げられたところはよかったと思いましたが、何秒残して再開するかをもっと確認・吟味して再開すべきだったと反省をいただきました。</p>				

審判員	平山智章(栃木)・高橋克典(千葉)・南出大輔(神奈川)		報告者	平山智章
カード	豊野(埼玉) vs 七林(千葉)			
コート	Aコート	主任	星河聖 氏 (群馬)	
<p>前日の反省を意識し、チームファウルのバランスやファウルとして取り上げるケースなどはクローで共有しながらゲームを進めました。一方、個人ファウルについては、前半で4ファウルになってしまったプレーヤーが出てしまうなど、笛や言葉で伝えることの難しさを改めて痛感しました。また、3人で取り上げているケースは一貫していたが、その中でもノーコールにできるケースがいくつかあつたと反省をいただきました。コート上で話していたことを試合後の反省でいただき、コートの中でのコミュニケーションがやはり大切だと感じることができました。接触の事実だけでファウルをコールしてしまったケースがあり、長くプレーを見届けた上での判定・判断を改めて心がけていきたいと思いました。また、そのような時の自分のメンタルコントロールも必要だと改めて感じました。</p>				

審判員	根本優(茨城)・平山智章(栃木)・小野里健太(群馬)		報告者	平山智章
カード	実践学園(東京) vs 十日市場(神奈川)			
コート	Aコート	主任	一色渉 氏 (本部)	
<p>1Qは3人とも落ち着いて自分のエリアを判定していてよい入りだった。ゲームフローとしては目立ったケースが無かったので、クォーターが進むにつれてプライマリとセカンダリの笛が同時に鳴ってしまったりするケースが目立ってしまい、その点は勿体なかったと反省をいただきました。レフェリングのタイプとして様々なタイプがあるが、それぞれの良さを活かしながら、クローで擦り合わせられると尚よかったと反省をいただきました。セカンダリでコールする際には、笛を吹くタイミングだったりケースを更に吟味し、コミュニケーションを図っていきたく感じました。試合が進んでいく中で、交代で入ってくる選手のプレー(手の使い方など)をゲームにアジャストさせていけるような笛が入られると、違和感なくゲームを見ることができると反省をいただきました。ゲームとしてのテンポセットに加え、交代で入ってくる選手のテンポセットなども考えながら、プレイコーリングに繋がられるようにしたいと思いました。最後に、今回の派遣にあたり、準備よりご尽力いただきました地元千葉県の皆様、派遣に際しご配慮いただきました梶審判長をはじめ栃木県の皆様に心から感謝申し上げます。報告といたします。</p>				

審判員	雨宮恵(山梨)・南出大輔(神奈川)・倉持雄一(栃木)		報告者	倉持雄一
カード	志茂田(東京) vs 市川六(千葉)			
コート	Cコート	主任	岸由貴氏(指名)	
<p>PGCでは、クルーで協力してゲームを進めることを目標にしました。そのためにできることとして、表示物の確認や、メカニクスではリードのローテーションを積極的に進めない、ボールサイドを手厚く見ること、明らかな判定をすることを再確認しました。また、クルーでアイコンタクトをとるなど、丁寧に進めることを話合いました。</p> <p>ゲーム序盤、明らかなファウルやヴァイオレーションをコールすることができました。一方で、ボールを見つけてしまい、自分のエリアを超えたコールをしてしまう場面がありました。エリア、プライマリーを再確認する必要があると感じました。</p> <p>ゲーム中、ショットクロックヴァイオレーションをコールした際に、ゲームクロックまで意識を向けられませんでした。ゲームクロック、ショットクロックなどの表示物の確認不足と、決断力のなさを痛感しました。今後同様な事象があった際は、表示物をクルーで確認できるようにしたいと思いました。</p>				

審判員	草野伸明(東京)・清水倫人(山梨)・倉持雄一(栃木)		報告者	倉持雄一
カード	榛名(群馬) vs 小手指(埼玉)			
コート	Aコート	主任	岡崎武史氏(千葉)	
<p>PGCでは、メカニクスを大切に行ない、プライマリーが笛を鳴らせるようにすることが大切であると、話をしました。また、判定に関しては、ペイセント、ケイデンスのコールを意識して臨むよう確認しました。</p> <p>ゲームは点の取り合いが激しい展開となりました。その中で、レフェリーディフェンスをし、確認をしたうえで、不当なコンタクトを判定していくことができました。また、コンタクトはあるが、オフェンスに影響があるかどうかまで見極め、判定をする場面があったが、吹き急いでしまうこともありました。落ち着いて判定するためには、講師の渡邊諭氏によるレクチャー内容でありました、プレーを見に行くことが大切であると反省しました。メカニクスをしっかり行なったうえで、ペイセント、ケイデンスコールに挑戦したいと考えます。</p>				

審判員	加藤暁生(東京)・村上翔(埼玉)・倉持雄一(栃木)		報告者	倉持雄一
カード	ちはら台南(千葉) vs 新島学園(群馬)			
コート	Dコート	主任	山崎敬次郎氏(千葉)	
<p>PGCでは、リードのローテーションをプレーに合わせてローテーションするかどうかを決めながら、進めていくことを話しました。また、勝者は全中が決まり、敗者は引退となる試合のため、明らかなものに笛を鳴らし続けること、表示物はクルーで協力することを確認しました。</p> <p>ゲーム始まりに、PGCで確認した通りに、あきらかなファウルをコールすることができました。その際に、リードのローテーションを無理にしないことをクルーで話合いました。その後は、ローテーションしないことでセンターが強く笛を吹き続けることができました。徐々に、お互いのディフェンスが激しくなり始めたのを気にして、ローテーションをするようにしました。ローテーションすることでイーガルのディフェンスのファウルをコールでき、テンポセットとして進めることができました。</p> <p>ゲーム終盤になるに連れて、各チームの選手の個人ファウルが積み重なってきたため、選手たちにコミュニケーションをとろうとクルーで試みました。最後は、選手たちが試合を決め、熱いゲームにすることができたのではないかと考えます。</p> <p>ミーティングでは、最後まで自分が判定するべき場面で、判定することができなかったこともあり、ゲームを通して一貫性をもって吹き続けなければならないと、痛感しました。今大会で学んだことを、県内の審判活動にも繋げていきたいと思います。</p> <p>最後に、今回の派遣にあたり、準備よりご尽力いただきました、地元千葉県の皆様、派遣に際しご配慮いただきました梶審判長はじめ栃木県の皆様に心から感謝申し上げます。</p>				